

## 平成 24 年度第 1 回河川工作物アドバイザー会議論点等整理

### 【H24 第 1 回河川工作物アドバイザー会議論点整理】

#### 1 オショロコマ調査（長期モニタリング）について

※オショロコマ調査については、10～20河川を対象に、年2～4河川を5年で一巡するような継続的なモニタリング調査が必要（H23 第3回APにおいて谷口・河口オブザーバーより提案）。

※これまでの調査の結果、知床半島の西側に若齢級の出現が少ない。要因はダム等の工作物の影響よりも水温によるものが大きいと考えられる。

※水温環境を守るため、湧水が発生しやすい間隙水域をどう確保するかも重要。今後の構造物の改良方法にもつながると考える。

#### （H24 第 1 回 AP 論点）

○オショロコマ調査の対象河川や調査内容については、来年度の調査実施に向け、谷口・河口オブザーバーにご意見等を踏まえて原案を作成し、次回APまでに各委員にメール等で事前照会することで確認。

#### 2 世界遺産委員会決議に係る今後の対応について

##### ①決議文「サケ科魚類の移動と産卵の状況のモニタリングを継続」について

※「河川工作物改良効果等を把握するための遡上等モニタリング」の見直しについて事務局より提案。

##### ②決議文「サケ科魚類の移動と産卵を確保するために、ルシャ川において、必要に応じて、その他適切な手段を含む河川工作物のさらなる改良を行うことを検討」について

※今年度のルシャ川の孵化場撤退に際しては、地元漁業者と調整し撤退を決めた。今後、ダムをどうしていくかは、地元の皆さんとの合意形成を求めていくことが必要である。

※孵化場撤退に伴う稚魚放流停止により、シロザケやカラフトマスの回帰は減少することも考えられるが、これは自然の状態に戻ることであるので、世界自然遺産地域の核心地としては望ましい姿である。

※第1ダムの下流の副堤部分が河床低下している恐れがあるので調査をして欲しい。この部分は深い淵となっており、遡上したシロザケやカラフトマスにとって重要である。しかし、ダムを撤去すればルシャ川で深い淵がなくなる。

**(H24 第1回AP論点)**

- ルシャ川の取り扱いについては、地元の現場（漁業者）の意見を訊くことが重要。
- 時間をかけながら、地元等との話し合いを深めながら、将来のルシャ川のあり方について検討していくことが肝要。

## 【H23 第3回河川工作物アドバイザー会議における論点整理の整理】

### 1 サケ遡上に関する長期モニタリングの対象河川としてテッパンベツ川が必要ではないか？

※サケ科魚類の遡上数等調査の対象河川については、ルシャ川のベースラインとしてテッパンベツ川での調査が肝要。また、羅臼側では自然河川としてルサ川で長期的に個体数を調査することも必要。

※オショロコマ調査については、10～20河川を対象に、年2～4河川を5年で一巡するような継続的なモニタリング調査が必要（谷口・河口オブザーバーからの提案）。

#### (H23第3回AP論点)

○対象河川は、ルシャ川、テッパンベツ川とし、予算状況を勘案し、可能であればルサ川を台形近似法で実施（事務局提案）。

○調査方法等については、委員の意見を聞きながら進めることを確認。

- (結論) 遡上数等モニタリングの調査河川については3河川で実施
- (検討) 遡上数等モニタリングの調査精度を上げるために、調査日数の増の検討が重要
- (継続) オショロコマ調査・・上記H24 第1回AP論点整理で再掲載

### 2 河川工作物アドバイザー資料等については、西暦で併記すること。

※過去の資料との比較の意味で、資料等については西暦で併記して欲しい。異動により者が代わる場合は引き継いでいただきたい。

- (継続) 引き続き対応

### 3 羅臼川砂防えん堤上流における温泉水の影響を確認すべきではないか？

※温泉水の影響により自然産卵しても資源にならない可能性があるため、砂防えん堤上流及び本川の水温を測り、温泉水の影響を確認する必要がある。

- (継続)
  - 羅臼川支流の水温データが必要
  - ・ 支流データの調査と調査結果を踏まえての今後のモニタリングのあり方について小宮山委員と相談

## 【H23 第3回AP以前の論点整理の継続案件】

### 1 羅臼川砂防ダム改良工事にもなって上流側の土砂をどう扱うべきか？

※羅臼川はサケの遡上が旺盛である反面、産卵環境は非常に少ないので、流下してく礫が重要。このため、既の実施されている産卵床と遡上数の調査結果や昨年12月に流出した土砂の堆積状況等の調査などを通じた検討が必要。

#### (H23第2回AP論点)

○下流の河川環境に考慮し、ダム改良工事における上流部の掘削は最低限にとどめることとし、改良中のダムの魚道部分に溜まった土砂については、シロザケ等の遡上に影響が出るようであれば対応する。

→上流部の盛土部分や河床の土砂等を動かした箇所については、工事完成後、元あった状態に戻した上で、今後モニタリングで土砂の変遷を観察していきたい。

→魚道機能確認実験（1/5模型）の結果問題はないと考えているが、今後モニタリングを続けていきたい。

（H24第1回AP事務局発言）。

○スリットを開けたことにより上流の河川工作物に影響を及ぼさないよう河床低下の状況についてモニタリングを実施。

○産卵床に適した環境をつくるため、工事箇所上流の大石やコンクリート塊等を分散型落差工の材料として有効活用し、小砂利を堆積させる工法の検討も必要。

→（結論）上記を踏まえ、来年度よりモニタリングを開始

### 2 赤イ川の堆砂の取扱いについてはどうすべきか？

→埋まった淵の復元については、北見管内さけ・ます増殖事業協会と相談の結果、当面は自然の推移を観察とした（平成24年度の対応）。

※赤イ川の鋼製えん堤の堆砂は砂質が主であり、自然の推移に任せて堆砂を流すことについて、漁協関係者を含め合意。ただし、スリット化工事に伴って埋まった淵については復元することとし、復元手法を増殖協に相談しつつ検討。

→（継続）このまま水位を保っていけば、自然な淵が形成されるのではないか（H24第1回AP増川氏発言）。